

03 不登校傾向の子どもへの対応は？

担任経験12年目・女性
 学年主任をしています。
 学年に不登校や集団不適應の子どもが3人います。来年度4月からのことも心配なので、学年で対応を考えています。対応の基本を教えてください。

A 子どもの特性をよりの確に把握し、教育・福祉・医療等の連携を具体化しよう。

不登校や集団への不適應を示す子どもの、心身や家庭環境などの状態をよりの確に把握し、数多くある対応事例から有効と思われる手立てを探り、福祉や医療などとの行動連携も踏まえた「チーム学校」で対応していく。

戦略の構造 /

不登校・不適應傾向のある子ども

- 子どもは、学校でいろいろな友達と関わりながら健やかに成長したいという願いをもっているし、その権利がある。保護者はその義務を負っている。

不登校や集団不適應の子どもの心情

理由ははっきりしないが、「学校」という枠組みの中で生活することが苦しい。



特に母親と離れることが不安で仕方なく、学校にいる間、ほとんどの時間が不安定な気持ちでいる。



人を信頼できず、関わりをもつことが不安で仕方がない。

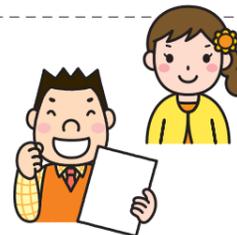


担任の役割

不登校傾向や集団不適應傾向のある子どもが抱えている課題や、その背景にあるものを探る。



校内で対応する「チーム学校」としての状況分析と具体的手立てを整理する。



対応策を実践し、全ての子どもが学校生活を送る環境を整える。



学校に登校・適應できない要因を一つ一つ解消し、子どもの学校生活を保障する。

不登校傾向の子どもへ対応するポイント

「登校できないこと」の重さをかみしめる

子どもは、将来の社会を築いていく大切な存在であり、誰もが生きる力を身につけて、幸せになる権利をもっている。学校は、この実現に重大な役割を負っている。全ての子どもに、成長する環境が保障されなければならない。しかし、集団に適應できなければ、教育活動を通した成長は難しいし、まして、登校してこれなければ、学校や教員(担任)は為す術もないことになる。つまり不登校状態を解消することは、社会全体の問題であり、学校は特に大きな責任を負っている。

地域総がかりで対応する中心としての学校

学校や集団への不適應状態が起きる要因は様々であり複合的でもある。学校の力だけでは解決できないケースがとても多い。義務教育段階で引きこもりになってしまい、15~34歳の「若年無業者」と言われる者の数は、2015年で50万人を超えている。学校教育だけでなく、子ども家庭支援センターや児童相談所、主任児童委員などの福祉や、医療機関などとの連携を積極的に進め、その子どもの状態に応じた手立てを地域総がかりで進める必要がある。

不登校・不適應の要因分析を丁寧にしよう!

- 1 その要因は多様かつ複合的で、一点に絞るのは難しい。しかし、その中心要因を明確にすることから、適切な対応がスタートする。
- 2 そのためにも、関係教員で総力を挙げて情報を多面的に収集・分析し、具体的な手立てを講じていく。

情報収集の視点

- 不登校や不適應状態が始まった時期は？
- その様子が顕著になったきっかけは？
- これまでの支援・対応は？効果があったのは？
- 相性の良い対応者は？
- 保護者の意向は？
- 家庭の環境要因は？
- 関わりのある関係機関は？

特徴的な様子から中心要因を探る(チェックリスト)

- 画一的な雰囲気のある「学校」そのものに強い違和感や抵抗感がある。
- みんなで揃えることに抵抗感がある。
- みんなに見られることに大きな抵抗感がある。
- 就学前から母子分離に課題があった。
- 母親と離れることが、見捨てられることと思っているふしがある。
- 自分の意志に関係なく、行動や方法、時間が決められていることに耐えられない。
- 人に不信感を抱いていると思われる様子があり、人と目を合わせたり話したりできない。

不登校対応の全体構造を描き、どこからでも手立てを講じられるように!

- 1 子どもを中心に、関わりのある人や組織、機関などを図式化する。
- 2 担任している不登校傾向の子どもを取り巻く現状を図に描き入れ、講じることのできる手立てを決めていく。
- 3 ②の図をもとに、校内で情報共有する。

山下さんのケースは、大沢さんのときの関係図が参考になるかな。

山下さんの場合、教育相談機関と医療機関との連携を深めていく必要がありますね。

ある事例(大沢さんのケース)

